身延線鉄道唱歌

作詞　小澤　肇

一、
汽笛一声　富士駅を　我が乗る列車　離れたり
三十九駅　九十粁　普通列車の　旅とせん

二、
柚木　竪堀　入山瀬　近代製紙の　起きたとこ
三大仇討ち　一つなる　曽我兄弟の　寺社もあり

三、
右に霊峰　仰ぎつつ　富士根にたなびく　雲の帯
富士宮は　登山口　浅間大社に　湧き水に

四、
西富士過ぎれば　左に見える　安居山あたりの　海の砂
川もないのに　沼久保で　しばらく富士山　さようなら

五、
三大急流　富士川に　沿って行きます　芝　川
筍　梅の　産地なり　水やみどりに　富める町

六、
戦国武将　信長公　首塚　西山本門寺
平家の若武者　維盛の　お墓が稲子の　奥にあり

七、
稲子で駿河を　後にして　甲州　十島　良いところ
昔は身延路　御番所で　今は電車で　自動車で

八、
井出ては寄畑　内船へ　南部の火祭り　空焦がす
奥州南部の　祖の地なり　威風は今に　伝えらる

九、身延の駅に　降り立ちて　日蓮宗の　総本山
五重塔の　再建に　枝垂れ桜木　花添える

十、信玄公の　隠し湯の　下部で疲れ　癒されん
湯の奥　甲州金山は　武田氏支えた　軍資金

十一、一ノ瀬　久那土　甲斐岩間　印章で名高き　里にして
向かいの西島　和紙づくり　書家の望み　叶う町

十二、視界が開けて　鰍沢　舟運の名残り　今は無く
敷かれし鉄路に　拠る処　甲駿交流　夜明けなり

十三、市川大門は　花火まち　知恵の文殊は　甲斐上野
歌舞伎の市川　出たところ　夢々　共々　忘れなん

十四、笛吹川を　打ち渡り　見よや　果樹やら　野菜やら
果樹王国と　謳われる　甲府盆地の　花輪なる

十五、四方の山に　目をやれば　雲突く山脈　いや高く
老樹の深き　善光寺　石和の湯けむり　指呼の間

十六、終点甲府は　中央線　乗り継ぐ人も　数多く
躑躅ヶ崎の　夢のあと　武田の遺跡　守れかし

十七、時は人を　替えれども　山梨静岡　両県の
明るく平和な　郷づくり　身延線と共に　栄えあれ
身延線と共に　栄えあれ

身延線の沿革

一、創設の認可　明治四十四年（西暦一九一一年）四月二十六日
二、社名　富士身延線鉄道株式会社
三、資本金　四百万円
四、工事着工　大正二年一月八日（一九一三年）
五、部分開通　大正九年五月十八日（一九二〇年）
　富士駅から身延駅まで汽車運行
六、全線開通　昭和三年三月二十八日（一九二八年）
　富士駅から甲府駅まで電車運行　八十八、四粁
七、国鉄移行　昭和十六年五月（一九四一年）
　日本国有鉄道　線名を身延線とす
八、民営化　昭和六十二年四月（一九八七年）
　社名　ＪＲ東海道旅客鉄道株式会社
九、付記　平成二十年四月六日（二〇〇八年）
　身延線全線開通八十周年記念行事と合わせ、
　富士宮駅高架化着工祝賀行事、富士宮駅で開催

富士　木
柚堀　瀬
竪根　寺
入山　宮
富士　道
源富　士
西富士　宮
沼久　保
芝　川
稲　子
十　島
井　出
寄　畑
内　船
甲斐大　島
身　延
塩之　沢
波高　島
下部温　泉
甲斐常　葉
一ノ瀬　土
久那　間
甲斐岩　居
落　口
鰍沢　門
市川大　町
市川本　川
芦　野
甲斐上　輪
東花　川
小井　永
常　母
国　吉
甲斐住　府
南甲　寺
善光　手
金　府
甲